

# 戦争戦災体験

●阿佐谷南三丁目

仁木 マサノ

(大正七年生まれ)

昭和一七年三月、結婚のため新潟県から上京致し、一五日挙式という前日に警戒警報発令となり、夜は灯火管制で外は闇。でもこのころはまだ新婚旅行にと舅が手配して下さり熱海へ行きました。当日朝から雨で、式後東京駅を出るころは薄明るかったのですが、真暗な駅に着き出迎えの番頭さんの案内で雨の坂を登ったり下りたり、随分歩いて着いた時は新調の草履が履けないようになり、翌朝宿のお世話で赤塗の下駄を譲って戴き、二泊して四谷荒木町（現四谷三丁目）に落ち着きました。

四月、義弟が大学卒業と同時に現役で入隊。四月に入って東京に初空襲がありました（日は忘れませんでした）。大きな爆音に思わず空を見上げると、見馴れぬ大型飛行機が低空で屋根の上を過ぎ、操縦者の顔が見え、誰かが「アメリカだアー」と叫んだ時、空襲警報が鳴り、そのころもう牛込の方向に煙が上っていて鶴巻町あたりが被災したそうでした。

中支から帰って半年の主人は必ず赤紙が来るからと、志願して司政官になり南方へ征き、翌年にはもう一人の義弟が東

北大を九月卒業、家から通勤出来る会社に就職したのも束の間で一月応召。両親と義妹と私で留守を護るこのころから食糧不足は深刻になり、町会の配給の報に駆けつけ、四人分で大根の輪切が三センチ位、葱の時は白いところ半分でも毎日ではないので、伝手を頼りに妹と月二回位保谷まで買出しに行き、三〇キロ位を背負ったり持ったりして、一日一人一合のお米に混ぜてお粥をつくり飢えをしのぎ、たまに卵を五個位分けて戴けると涙が出る程ありがたく貴重でした。

昭和二〇年に入り二月の二〇日過ぎ、日中空襲といふので姑と二人防空壕に潜んでおりますと、竹箒ぼうちきでトタン板を掃くような音がし、解除になって出て見ると、盛んに煙が上って坂下町、舟町あたりが被災した様子でした。艦載機が編隊で来たそうで大本営を狙ったのがはずれたのでしよう。

三月一〇日夜の大空襲のときはラジオで東京接近を聞き、ドキドキしながら用意を整え町会の方の指図を待ちました。が、事無きを得、下町全滅と聞き大変な事態だと思いましたが、後で気付いたことですが、真夜中でしたのに空が真赤で、明

るく、人の顔はもちろん小さな紙切の字まではつきり読めま  
した。翌々日、町会の若い男性は被災地へ片付けの奉仕に出  
掛けて、夜帰宅する早々に家族を田舎へ疎開させ、二、三日  
のうちに老人や女子供の姿がほとんど無いようになり「とに  
かくひどいよ。恐ろしくて話も出来ぬ」とのこと、年寄り  
と女だけの私宅ではオロオロするばかりで、この時から、夜  
寝る時もモンペのままでした。

四月一三日夜、空襲警報にまたかと思いい用意して待機。「四  
谷駅あたりが火の海だ!!」さあ!とばかり指図に従い一列に  
並び、縄につかまり町会の旗を先頭に明治神宮の絵画館前の  
木立の中へ避難し、夜が明け始めたころ警報が解除になり、  
家へ帰れると思ったところ、役員の方から「只今我が町のほ  
とんどが焼け落ち全滅状態です。」と聞かされ、一同声もなく  
指示通り皆一列になって四谷第二小学校へ向かいました。炊  
き出しのおにぎりに一息ついて、五日間のうちに各々落着き  
先を定めるようにとの事でした。

お昼近くになって焼跡へ行って見ようと大通りへ出てびつ  
くり!!四谷から新宿・牛込の方まで焼野原が広がり、見渡す  
限り灰色一色、焼けた柱もない始末。銀行や土蔵が中は空で  
も外廊だけポツリポツリと残っていて、所々で土蔵から盛ん  
に煙や火を吹出しているもありました。

我が家へ戻ってまず驚いたのは、地面に灰色の畳があり目  
まではつきりしていて、玄関脇の本棚はそのまま立っていて、  
皮表紙に金文字のものは読める程でめくれた頁の活字もはっ  
きりわかる状態で、床間の立てかけて並べてあったレコード

のアルバムもそのままの型でまだ真赤になっているところも  
あり、棒でちよつと触れるとすべてはかなく崩れてしまいま  
した。二階の押入にあったはずの茶道具が家の真中に置いた  
ようにあり、茶釜は長い間重宝しました。お茶碗も一箇だけ  
高熱で雲形の模様加わり、風情あるものとなり現在でも使  
えます。玄関の外に野菜を埋めて置いたのを思い出し土を除  
きますと、ホカホカ湯気が立って蒸焼になり甘くおいしく皆  
で食べ、あの美味さは今でも口に残っています。防空壕は蓋  
のすき間から熱い煙が入ったらしく、上のものは焦げて駄目  
でしたが、下に入っていた先祖の形見の掛軸が無事でした。

夕方、以前からお話を戴いていた阿佐ヶ谷の知人を妹と二  
人で尋ねてきました。ちょうどお隣が御主人応召のため郷  
里へ引上げられて、今朝から空いているからと家主さんにお  
頼みして戴き、早速その晩に引越!!リュック一箇とバケツと  
雨傘だけ!。

二五日にまた空襲で御近所の方々と成宗田圃たんぼ(現在の阿  
佐ヶ谷団地)へ避難し、再被災を覚悟しましたが、川端通り  
から杉七小の一部が被災、三菱銀行も天井に穴が開いており  
ましたが、私どもは無事でした。保谷への買出しは鷺宮から  
境まで西武線があるだけであとは歩くので大変でした。

その後は富山だ、長岡だ、甲府だ、八王子だ、と地方の空  
襲が烈しく、八月広島、長崎、そして一五日玉音放送を涙な  
がら拝聴し終戦。

主人と下の弟は帰りましたが、中の弟はレイテ島で戦死と  
わかったのは五年後でした。

# 東京大空襲を受けて

●梅里一丁目

土方 晋

(大正一一年生まれ)

昭和二〇年五月二十七日（註：以下二五日か。原文のまま）は、三月一〇日の東京下町へのB29米機大空襲に続き、山手一帯が焼夷弾の大空襲を受け、東京の大部分が焼土と化した記憶すべき日で、杉並区東部地区も焼失しました。

現在は約半世紀を経過し、罹災地区は戦後建築のビルと住宅が林立して、大空襲の跡は皆無、かつ罹災体験者も少数となったので子、孫のため記録する次第です。

三月の焼夷弾による下町大空襲以後、東京都民は毎晩防空服装で就寝しており、五月二十七日深夜の空襲警報では大空襲が予報され、私はすぐ起きました。B29の大編隊は通例、サイパン島から富士山を目標に北上し、箱根山付近で東京へと東北方向に向かいます。警報から東京上空に飛来まで約一時間余を要するので、その間に貴重品を自宅庭の防空壕に入れ、更に消火準備するのが常です。

当時の我が家は環七通りに沿った堀ノ内に所在していたので、早速二階から東方、新宿方面を眺めていますと、B29の飛来と同時に火の手が新宿、中野方面に上り、その炎もかな

り上の方まで強く揺らぐのが見えました。予報通りの大空襲です。

帝都防衛の高射砲隊は、大宮八幡の北側台地にあった陣地を始め、各所からサーチライトが交差する高度八〜九〇〇メートルを飛ぶB29の大編隊を目掛け発射するのですが、その弾道が花火の上がるように見えるものの、届かぬものがほとんどです。防空戦闘機の攻撃するのにもかかわらず見えたのが、四発の巨体には抗し得ず、特攻の体当たり攻撃でB29の巨体が一機落下するのが見えた程度で、米空軍の一方的空襲でした。

我が家の周囲も、灯火管制で真暗のはずが中野方面の火災で相当明るくなりました。大空襲の終わるころ、西の大宮方面から飛来した一機が妙法寺門前通り南側一帯を環七通りにかけて焼夷弾を落し、ドンドンという地響きを聞くとすぐパツと火の手が上りました。私は二〇代の元氣一杯のころでしたから鉄兜をかぶり、防護服に水をかけ近所の若者と一緒にバケツ消防に努力しました。

しかし何発もの焼夷弾を受けた家、避難後空家となった家からどつと上がった猛火には手がつけられませんが、我が家の北側道路から門前通り（東側半分）まで約四〇〇メートルの地域は環七両側にかけてまたたく間に全焼しました。東は現在日立杜宅のある一帯が、当時空地で延焼は防止されました。（この時、妙法寺西側の昆布巻工場とその付近、更に五〇〇〇坪の境内があった菩提寺の西方寺も全焼しました）。

我が家は環七通り西側の角地で、北側道路の向こう側一軒を消火したので、我が家以南は延焼を免れました。この折の体験は、消火は初期に限り、火勢が強くなったら空地や風上に逃げる他はありません。また、警報後空屋となった家の多くは、三月の下町大空襲経験者からの口伝で避難第一となったものでしょう。

翌朝、北側横丁の通り中央に約七〇センチメートル程の長さの焼夷弾の鉄筒一〇本が、一列に半分土中にめり込んでいるのを発見し、もしも一〇メートル南に寄っていたら我が家も被弾したと感じ、ぞつとしました。

焼夷弾は屋根を貫き床で発火するものが多く、少量なら消すことができるので、この時期までは皆、消火に努力していましたが、大量の場合は無理なことが判かりました。また、家の中ならともかく、路上で頭や首に当たれば即死です。二、三日後、防空壕を信じて避難し、道路際の防空壕で真黒に焼かれた数体の遺体を見たことや、強制疎開で自家をこわして移転した人が却って生命が助かった運、不運を感じました。

当時直感したことは、三月一〇日の下町大空襲は陸軍記念日を、五月二七日の山手大空襲は海軍記念日を意識して日本の戦意低下を図ったものということでした。私たちの世代は一般国民も敗戦の負い目を感じていたため、昭和一六―二〇年の大戦やこの二度の大空襲で東京が焼土と化したことを、子供たちに語ることを抑制し過ぎた傾向があります。そのためか最近では、この二度の大空襲を知らない若い方が多くなつたと思えました。更にその当日が陸軍と海軍記念日に当たることを知っている人はほとんどないのに驚き、語り継ぐ歴史の必要性を感じました。

即ち四〇年前のその日は、明治三八年三月の奉天の陸軍の辛勝、五月の日本海海戦（対馬海峡）の完勝は、大空襲と同様な大事な歴史的事実です。日露戦争は、ロシアの帝国主義と日本の帝国主義が朝鮮半島の主導権を争い、劣勢の日本が戦費の半額余を外債で賄って戦い、特に五月の海戦の完勝によりアメリカの仲裁で講和に持込み、日本の防衛ができたものと思つています。日本海海戦の完勝は、現在では我が国よりもロシア帝国主義の圧迫を受けた諸国、特にフィンランドやトルコ等で有名です。

四〇年前の出来事は、ちょうど父親が子供に語れば文書によるよりも強く伝承されます。私たちの青少年時代は日露戦争の辛勝を語る人がいたので身近に感じ、書物によるよりも記憶は鮮明です。そして、四七年前の大空襲を伝えることが大事だと思えます。

# 空襲とハンケチの思い出

●天沼三丁目

福島 玄一

(明治四四年生まれ)

私は戦争中、荻窪の自宅から田無の中島航空金属田無病院へ自転車通勤していた。ある日、途中で一枚のハンケチを拾った。それには東京の地図が印刷され、重要な建物には番号が付けられていた。それはそれまでの東京の爆撃の状態から見て、東京の爆撃の順序のように思われた。副社長のアメリカ人が帰米の前に、病院の先生方を集めて、お別れのコーヒーパーティーを開いて下さった。その時使用したコーヒー沸かしを見せて、これはアメリカの一〇セントストアーで買ったものだが、何年も使用していると言われた。そして彼は、この工場は絶対に爆撃されることは無いとも言われた。実際、三鷹の中島飛行機の工場は空襲の度毎に爆撃され、あと形も無い無惨な姿であったが、私たちの工場は爆撃を受けることもなく、一度玄関の前に爆弾が落ちただけで大した被害もなかった。

私はハンケチに書かれた順番で杉並に爆弾の落ちる日を指折り数え、不安の日々が続いた。爆撃も東は高円寺まで来たと、荻窪の清水町の一角にも焼夷弾が落されたが、早い消火

活動で被害も少なく、その後の爆撃は無かった。一トン爆弾が落されるようになって、私の家の周囲一キロ附近にも落ち、天沼踏切の脇の家はあと形もなく、二階建ての家は爆風で二階が吹き飛ばされ、一階建てに変わっていた。よく野菜を分けて頂いた農家は跡形も無く、大きな丸い穴の底には水が湧いていた。田無病院から爆撃を受ける市内の方を見ると、次々と落下する焼夷弾の火が花火大会を見ているように美しかったが、被害を受ける方々の事を思うと悲しかった。

青梅街道も中島飛行機へ材料を輸送するために天沼陸橋が作られ、道路も拡張された。今、昔のままの青梅街道の様子が見られるのは、荻窪駅前の交番と商店街との間と線路沿いにある荻窪銀店街のみである。

今、残念に思うのは、貴重なハンケチを、当時会社に配属されていた軍人さんに差し上げてしまったことである。

東京都35区町会・隣組組織 附・人口

(昭和17年4月1日現在)

| 区名   | 町会    | 隣組      | 町会会員      | 1町会当 |       | 1隣組当<br>会員数 | 人口        |
|------|-------|---------|-----------|------|-------|-------------|-----------|
|      |       |         |           | 隣組数  | 会員数   |             |           |
| 麴町区  | 30    | 867     | 10,772    | 29   | 359   | 12          | 58,521    |
| 神田区  | 63    | 1,740   | 24,531    | 28   | 389   | 14          | 128,178   |
| 日本橋区 | 95    | 1,707   | 18,453    | 18   | 194   | 11          | 101,777   |
| 京橋区  | 70    | 1,875   | 31,020    | 27   | 443   | 17          | 142,269   |
| 芝区   | 111   | 3,042   | 39,277    | 27   | 354   | 13          | 191,445   |
| 麻布区  | 50    | 1,471   | 19,942    | 29   | 399   | 14          | 89,163    |
| 赤坂区  | 37    | 997     | 11,338    | 27   | 306   | 11          | 55,704    |
| 四谷区  | 43    | 1,402   | 17,691    | 33   | 411   | 13          | 76,440    |
| 牛込区  | 80    | 2,134   | 28,779    | 27   | 360   | 13          | 128,888   |
| 小石川区 | 58    | 2,583   | 33,359    | 45   | 575   | 13          | 154,655   |
| 本郷区  | 65    | 2,258   | 30,680    | 35   | 472   | 14          | 146,146   |
| 下谷区  | 76    | 2,472   | 44,250    | 33   | 582   | 18          | 189,191   |
| 浅草区  | 84    | 3,574   | 64,777    | 43   | 771   | 18          | 271,063   |
| 本所区  | 78    | 3,837   | 57,608    | 49   | 739   | 15          | 273,407   |
| 深川区  | 76    | 3,245   | 48,563    | 43   | 639   | 15          | 226,754   |
| 品川区  | 84    | 3,776   | 51,399    | 45   | 612   | 14          | 231,303   |
| 目黒区  | 57    | 3,721   | 46,035    | 65   | 808   | 12          | 198,795   |
| 荏原区  | 58    | 3,331   | 42,511    | 57   | 733   | 13          | 188,100   |
| 大森区  | 83    | 4,762   | 63,877    | 57   | 770   | 13          | 278,985   |
| 蒲田区  | 68    | 4,173   | 60,647    | 61   | 892   | 15          | 252,799   |
| 世田谷区 | 80    | 5,522   | 65,240    | 69   | 816   | 12          | 281,804   |
| 渋谷区  | 36    | 4,416   | 57,098    | 123  | 1,586 | 13          | 256,706   |
| 淀橋区  | 30    | 3,449   | 43,582    | 115  | 1,453 | 13          | 189,152   |
| 中野区  | 73    | 4,193   | 49,091    | 57   | 672   | 12          | 214,117   |
| 杉並区  | 65    | 5,056   | 57,216    | 78   | 880   | 11          | 245,435   |
| 豊島区  | 98    | 5,846   | 73,432    | 60   | 749   | 13          | 312,209   |
| 滝野川区 | 41    | 2,718   | 30,403    | 66   | 742   | 11          | 130,705   |
| 荒川区  | 45    | 5,787   | 79,332    | 129  | 1,763 | 14          | 351,281   |
| 王子区  | 64    | 4,175   | 50,250    | 65   | 785   | 12          | 220,304   |
| 板橋区  | 107   | 4,936   | 56,761    | 46   | 530   | 11          | 233,115   |
| 足立区  | 74    | 4,380   | 55,880    | 59   | 755   | 13          | 231,246   |
| 向島区  | 38    | 3,821   | 45,435    | 101  | 1,196 | 12          | 206,402   |
| 城東区  | 34    | 3,494   | 41,438    | 103  | 1,219 | 12          | 192,400   |
| 葛飾区  | 52    | 3,031   | 39,241    | 58   | 755   | 13          | 153,041   |
| 江戸川区 | 83    | 3,180   | 41,763    | 38   | 503   | 13          | 177,304   |
| 計    | 2,286 | 116,971 | 1,531,671 | (51) | (670) | (13)        | 6,778,804 |

人口は昭和15年国勢調査に依る。1町会当隣組数の最多は359、最少は2、同会員数の最多は5,120、最少は20、1隣組当会員数の最多は68、最少は2。括弧内の数字は全市平均を示す。

<「新修 杉並区史 下」より>

# 私の空襲体験

●府中市朝日町一丁目

堀越 英男

(昭和四年生まれ)

戦前から戦後を通し、私は荻窪三丁目（現、五丁目）に住んでいた。

昭和一六年一二月八日は桃一小高等科一年生だった。大変なことになったぞと漠然と思っていた。しかし昭和一七年四月だったか五月だったか土曜日の午後、友だちと釣りに行くため餌のミミズを採っていたところ、突然激しく高射砲音が聞こえ、暫くして、いきなり空襲警報を知らせるサイレンが鳴りわたり、家に走って帰ったことがあった。この時は戦争してるんだと目が覚めた思いがしたものである。

靴が配給制になり、通学に下駄履きのこともあった。昭和一八年高等科を卒業、家業の青果商を手伝うべく昼間家で働き、夜は東京市立杉並商業学校（現、東田中学校校舎）へと進んだ。通い始めは各学科を学び、週三〜四時間は裸電球の付いた校庭で軍事教練を受けていたが、戦況が激しくなるにつれ英語は敵国語だからと授業から除かれ、教練の時間が増えていった。警戒警報が発令されても暗幕の中の授業を続けていたが、そのうち、警報が発令されると下校することになっ

た。教練に使われる三八銃も三年にならないと触れなかったのだが、二年になると銃を使った教練が多くなった。夏休みが終わって登校したら、校庭の半分はいも畑と化していたのも忘れることができない。

こんなこともあった。警報が解除になり学友と三人で荻窪の卓球場へ出掛けたときのことである。警察官が入ってきて「この非常時に卓球なんかして、お前たちは非国民だ」と大変怒られてしまったのである。

一方、家業の青果物も配給制になり、父親の手で十分になってしまったのである。ちょうど親父の知人の町会の事務長が来られ、町会の回覧配りをしてくれと頼まれ、昭和一八年夏から町会の仕事を手伝うようになったのである。最初に貰った給料が二〇円ポッキリだったことを覚えている。町会の仕事は主に転出入と配給の仕事で、防火用水槽、鳶口、火はたき、防毒マスクのあっせんもやっていた。印象に強く残っているのは、転出証明書の発行が多かったことで、空襲が激しくなっただけからは疎開する人が多くなっていた。



空襲は日を追って激しさを増し、確か昭和一九年の秋か冬になってからは、荻窪三丁目とか東荻町（現、荻窪三、四丁目）にも爆弾とか焼夷弾の落下が頻繁になってきた。特に私が入っていた防空壕（頑丈な町会の壕）から直線で一〇〇メートル位離れた民家に爆弾が落ちた時には、一瞬浮き上がるような感じで天井から砂が降ってきたものである。高射砲弾の破片が屋根や庇等に当るカチン、カチンという音、焼夷弾が落ちてくる時のザーという音、焼夷弾を束ねてあった金属製のベルトが落ちているのを何度となく聞いたり見たりした。また、回覧を配っているとき艦載機が飛来してきて、溝に隠れたり、生垣の下に伏せたりもした。

学校に通学して来る生徒は日増しに減ってきて、昭和二〇年三月には三年生が繰上げ卒業となり、杉並商業は我々を最後に廃校となった。私は仲間六人と新宿にある四谷商業へと編入学した。大半が学校どころじゃないと退学したり疎開したりで、バラバラになってしまった。直後に学校は焼けてしまい、半焼けの教室には罹災者が入り、生活するようになってしまった。学校からの帰りの省線（現、JR）が止り、新宿から荻窪まで歩いて帰ったことも三回程あった。

三月九日から一〇日にかけての大空襲のときは、東の夜空が真赤に染まり、一〇日には区の命令で罹災者を各町会単位で仮宿舎として引受けることになり、リヤカーを引いて引継所となった蚕糸試験場へ出掛けた。夕方まで待ったが杉並まで歩いて来られた人はほとんどなく、空車を引いて帰ってき

た。

連日、東京が空襲を受けるようになってからは、私は町会事務所に泊り込みとなってしまった。空襲警報が発令されると町会役員が事務所詰めるからである。現在のような宿直手当とか超過勤務手当といったものは無く、あることすら知らなかった。

隣の町内に焼夷弾が落ち、数戸が焼失した。現在の太田黒公園の北東側の民家であった。朝になって見に行つたところ、付近の砂利道は真直ぐ歩けない程の焼夷弾の燃え残りや不発弾が道路に突きささっており、油臭が漂っていた。道路でよかつた、家に落ちていたら被害はもっとひどかつたらうと思つたりした。

このころだった。町会長から、「うちの町内もいつ焼かれるかわからない。そうなたら君、罹災証明書を発行してくれ」と言い渡された。空襲警報が発令されると、南京袋のリュックに罹災証明書と世帯台帳、町会印箱を詰め込み、炒った大豆の非常食を持って壕に避難したものである。俺だけは生きていなくちゃ、という気持ちを強く感じていた。幸いにして罹災証明書を発行する必要なく終戦を迎えることができた。無我夢中で生きてきたんだと思う。

終戦の詔勅は町会事務所の中で聞いた。